

京女幾松

飄

々

広報委員

石田 健

幾松は若狭小浜藩士の木崎市兵衛の娘「計」として生まれる。父親が藩内の事件のため京都に出奔後、母親と他の兄弟姉妹と一緒に父親を追い、京に向かった。計はその後、14歳で京都三本木の吉田屋から舞妓としてデビューする。持って生まれた美貌と、若くて利発な計は芸事でも笛と踊りを得意とし、二代目「幾松」を襲名する。すると、瞬く間に京都でも一番といわれる芸妓へと成長した。

桂小五郎との出会い

幾松と桂小五郎は、とある宴席で運命的な出会いを果たす。小五郎はすぐに幾松を見初め、伊藤博文が集めた軍資金を惜しみなく使い、幾松を身請けしようとするが、幾松を贖戻にする豪商が小五郎と張り合う。そこで伊藤博文が、幾松の願いもあり、刀で相手の豪商を脅し、幾松は桂のものとなった。

禁門の変以後、長州藩は朝敵とされ京都から追放、徳川幕府から征伐される藩となった。長州藩士も京都所司代の下部組織である新選組に付け狙われることになる。池田屋事件で尊王攘夷派の藩士が新選組に襲われて殺されるが、小五郎は幾松の情報で辛くも難を逃れている。吉田屋に於いても、抜け穴や隠し部屋、つり天井等で幾度となく幾松に助けられている。

新選組の探索は一層厳しくなり、小五郎は一時、乞食の身形で二条大橋の下に身を隠していたこともある。しかし、小五郎と幾松の愛は揺らぐことはなく、幾松は自身の身の危険も顧みず、人目を

忍び、握り飯を小五郎に運び、献身的に尽くしていた。まさに命がけの恋である。

幾松と近藤勇の逸話が残っています

長州藩の控え屋敷に新選組が改めにやって来た。幾松は長持に小五郎を隠すと、素知らぬ顔で三味線を弾いていた。近藤勇が長持に手をかけると、「この中にはうちの下着が入ってます。見たいと言わはんのなら、見はってもよろしおすとも、もし何にもなかったら近藤はんに切腹してもらわんと……」。この言葉に近藤は「すまん」と言って立ち去ったという。

雪の日に新選組に捕らえられた時、幾松は死に化粧として寒紅を真一文字に引き、死んでも、小五郎の居場所は吐かないと覚悟を決めた。壬生の屯所にて、妻ならば小五郎の居場所を知っているだろうと拷問を受けた。長襦袢一枚にされ、冷水の拷問にも平気で耐える姿を見て、近藤勇は、肝の据わった幾松に敬意の念を持ち、以後、幾松には一切、手を出さずと配下の者に命令したとの逸話も残っている。

幾松の小五郎に対する命がけの愛は、まさに激しきこと火の如しである。

火のごとき 寒紅を引く 京女